

開催地名：奈良県十津川村	
開催日時	令和元年 10 月 1 日（火） 10：45 ～ 12：00
開催場所	十津川村住民ホール
語り部	佐々木 守（岩手県釜石市）
参加者	村職員、消防団幹部・分団長 50 名
開催経緯	<p>本村は、平成 23 年紀伊半島大水害によって、甚大な被害を受け、災害伝承の必要性は特に強く感じている。しかしその手法等の知識不足や人材確保等の課題があり、伝承活動が滞っている。加えて、南海トラフ巨大地震に備えるべく、地震災害への知識や教訓に関することを職員や住民に広く普及させたい思いで、本講演を実施することとした。</p>
内容	<p>（1）震災における釜石市の被害状況</p> <p>震度 5 弱～6 強を記録し、津波の最大高は推定 30 メートルのところもあった。人的被害においては死者 888 名、行方不明者 152 名で、家屋の損壊は市全戸の 29 パーセントに及び、産業については主要産業の漁業における保有漁船の被災が深刻で所有している漁船の約 98 パーセントが被災した。また、行政職員の災害対応も想定以上の被害状況も相まって、ほとんど機能しなかった。（ライフラインは全滅、庁舎は建物自体の倒壊もあって司令部として全く機能せず。情報収集も周知ができず、職員の数多くが被災、想定していなかった業務の対応等、とにかくマイナス要素ばかりですぐに手の打ちようがなかったことが挙げられる。）</p> <p>（2）震災から得た教訓</p> <p>上記の被害状況、犠牲が拡大した要因を細かく分析していくと、災害発生時の基本的な初動対応がしっかりとできていなかったためとわかったため、今後同規模の災害が発生したときにはしっかりと取り組んでいこうと思っている。特に下記に挙げる動作や、意識づけが重要だと思う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 何よりも命を守ること、災害で死者を出さない、震災後も死者を出さないことに全力を尽くす ・ いつか来るではなく、今すぐにでも来るという備え ・ 津波には地震直後に逃げるだけ ・ 自分で判断し、行動すること ・ 想定は目安、信じない 想定外はいつでもある ・ 情報に依存しない ・ マニュアルよりケースにより判断し行動できる

- ・ 優先順位を決める
- ・ 普段から顔の見える付き合い（連携）
- ・ 行政は全てをできない
- ・ 過去の例に縛られない

（3）私が伝えたいこと

あの日、3月11日、市庁舎で勤務していた私は、何も食べることができずに、寒さに凍え、三日三晩、何も情報がないまま災害対策本部で情報収集に追われていた。自分ではそのときの記憶がほとんどない。自家発電もない、備蓄もしていないという状況で、大変な思いをしたということ、特にトイレについては避難所では非常に重要度が高いということを感じたこと、県は県庁から連絡してくるだけで全く頼りにならなかったということを感じている。この大震災を通じて皆さんに改めて伝えたいのは、災害時に最優先されるべきは、あくまでも人命であるということである。まずは自分の命、家族の命、周りの方の命の確保を念頭に考えていただきたいと思う。そして、災害を踏まえた教訓を語り継いでいくこと、単に経験で終わらせずに歴史として残していくことが重要であり、我々の使命だと考えている。



開催地より

実際に大震災を体験され、先頭に立って乗り越えられた方のお話は極めて価値がある。本当にありがたいお話だった。改めて大震災の生々しい現状を知ることができたと思う。